

# 会報

第 65 号 (2023/9/4)

〒720-0082  
 広島県福山市木之庄町 4-3-14  
 Tel&Fax: 084-917-5337  
 Mail: i  
 h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp



Community Renaissance  
 Research Center

## 3年ぶりー！ 対面での総会を開きました！

2020 年度から3年間、コロナ感染拡大のため県からの指導もあり書面総会を持たざるを得ませんでした。去る6月10日(土)、本当に久しぶりにお互い顔を合わせたの総会を持つことが出来ました。

定款通り総会成立していることを宣言したのち、第1号議案から順次第5号議案まで提案が行われ、それぞれ満場一致で承認されました。

なお、今年度は役員改選をおこなう年にあたりました。それに先立ち、三好副代表理事、西山理事、藤井理事および佐々木監事から辞任の申し出がありましたので、新しく役員として廣中敏弘理事、寶諸純子理事および牧田幸文監事の方に加わっていただき、三好副代表理事の後任に松浦理事になっていただきました。退任された三好、西山、藤井、各理事および佐々木監事様には長年本会発展のために「尽力いただき、本当にありがとうございました。これからも会への「ご支援をいただけたらと思います。また新しく役員になっていただいた方々、お力を貸してください。」

## 今年度実施事業について

コロナ感染症拡大中はそのの行事はかなり縮小してまいりました。コロナ感染症が5類に移行したこともあり、次のような行事予定を計画しました。

- 1 これまでどおり、オカリナ教室、ジェロントロジー、ケアの社会学、地域の絆の祭り参加、山羊・ウサギのお世話、味噌づくり、小物作りなどの行事を実施
- 2 「地域の絆」のお祭りへのバザーの出店
- 3 仕事を組み込んだデイサービスの視察
- 4 ヤギのお世話をお願いしている、障害者の就労支援 B 型を行っている NPO 法人 ASAH の視察
- 5 昨年の実地調査に引き続き、12月2日に福山市立大学の澤田先生による「災害にどう備えるか」の実験と講演会

## 今後の予定

### 連続講座 オカリナが吹けるよ！

9月12日26日(火)

13時〜14時半

・講師：村山ひろみさん  
 (福山市立大学名誉教授)

・場所：ルネッサンス研究所 集会室

地域の絆のお祭りに参加しようと準備しています♪

### ジェロントロジー研究会

9月28日(木) 10時〜

・場所：ルネッサンス研究所

・参加費：300円

・内容：167ページ在宅医療について7月の例会は国連の『ヘルシー・エイジングの10年』の話で終わりました。

### 「ケアの社会学」を読む会

9月21日(木) 16時半〜

・場所：ルネッサンス研究所

・参加費：300円

・読む本：上野千鶴子著

『ケアの社会学』230ページ

## 今号の内容

- ・講演 高齢者が働くということ
- ・講演を聴いて
- ・エンドラとマグダラ若い女性を見守る高齢女性」
- ・ヤギが誕生
- ・編集後記

**講演 高齢者が働くということ**

〜アメリカ・ボストンの働く高齢者たち〜

**安川 悠子**

**1 はじめに**

イギリスに留学していた1970年代に、公園で退職後のご夫婦と思える高齢者カップルがゆっくりと語り合いながら散歩している姿をしばしば見かけていました。当時の50歳を過ぎたら早く職をしりぞぎ、退職後の生活を自分らしく送るイギリスの状況は、『福祉国家の理念』と考えられてきました。それぞれの国は年金や社会保障の充実した、イギリスのような福祉国家を目指してきました。

ところが21世紀になると、こうした福祉国家に対する考え方が変わり始めました。アメリカの工場で高齢者が働く様子を報告した『高齢者が働くということ』<sup>1)</sup>という本の中から、何が変わりつつあるのかをお話したいと思えます。

**2 高齢者がどのように働いているのか**

今日ここで取り上げた『高齢者が働くということ』という本は、ボストン郊外の小さな針の会社で働く高齢者の様子を、文化人類学者であるケイトリン・リンチ (Caitlin Lynch) が2年間にわたって参与観察<sup>2)</sup>を行ったものです。

この会社はミシン針や注射針などの小さな針を作っているところで、「退職」高齢者たちを積極的に雇用して成功している例でもありません。従業員は40名ほどで、その半分以上が定年退職後の74歳以上で、90歳代の高齢者も働いています。

ケイトリン・リンチはどのような問題意識を持って参与観察を行ったのだろうか？それは、普通なら悠々自適の生活を送っている高齢者たちが、なぜ工場での単調な仕事を言々として働いている理由を知りたい、ということであった。

**3 参与観察から見えてきたことは？**

- ① この工場で高齢者が働くという事は仲間が居るといふポジティブな意味を持つ。
- ② ここで働く高齢者は、自分の働きたい時間に出勤し、好きな時間だけ働くという風に、柔軟な勤務体制をとっていることです。
- ③ 高齢者はボランティアで社会とかかわることが多いが、この会社はマサチューセッツ州で決められた最低賃金で、働いた時間分の賃金が支払われている。

アメリカの老年学の創始者であるロバート・バトラーは『健康で前向きで、生産的で幸せな「老い」とは何か』と問っています。  
その回答がケイトリン・リンチの報告書から見えてきた①〜③だと私は思います。

**4 おわりに**

ケイトリン・リンチの行った研究報告は「高齢者の生きる権利を大切にすることはどういうことなのか」、を考えるきっかけを提供していると思います。きれいな施設をつくり、これまで暮らしてきた社会から隔離し、そこで守られて生活する高齢者。このことは高齢者が大事にされていると言えるのであろうか。

自分は子どもの頃疎開して畑仕事を始め、子どもも色々な手伝いをしていました。今になってみると、そのことは私にとって大事なことであったように思います。今日考えてきた高齢者をはじめとして、障害者や子どもたちも、すべての人は「人」である限り「働いて生きる」権利がありそれが喜びとなると言えると思います。

1) Caitlin Lynch, 'Retirement on the Line: Age, Work, and Value in an American Factory', Cornell University, 2012 (平野誠一郎訳『高齢者が働くということ』ダイヤモンド社, 2014)

2) 参与観察：参与観察に従事するものは、研究対象となる社会に、数ヶ月から数年にわたって滞在し、その社会の一員として生活しながら、直接観察し、聞き取りを行う。調査・記録にテープレコーダー、カメラなどを使うこともある。社会学、人類学、文化人類学、民俗学などでこの研究方法が使われることが多い。

総会終了後、安川代表による「高齢者が働くということ」〜アメリカ・ボストンの働く高齢者たち〜と題するお話をいただきました。その要旨をまとめました。

講演を聴いて



今回の講演を聴いてまず思い浮かんだのが、知人の軽度のアルツハイマーのあるお母さんの話です。お父さんも病気のため、デイサービスに行っているところでもとりあえず宿泊するようにしています。すると一日に何度もじゃんじゃん電話がかかってくる大変だったということでした。電話の内容は、「何もすることがないのに、なぜ私はここに居なければならぬのか。早く家に連れて帰れ」ということでした。お父さんの退院で自宅に帰ると落ち着いた生活をされていたそうです。その後お父さんが亡くなられ、申し込んでいたグループホームにたまたま空きが出て、そこにいられたそうです。グループホーム入居後は一度も電話がかかってこなかったとか。施設長さんの話によると、食後の食器洗い、洗濯をして干したりたたんだり、そして掃除などいろいろな仕事を進んでやられているとか。

知人のお母さんの例は、高齢者を一見大事にしているような何もすることがない状態は、かえって居心地が悪いと感じていることがわかります。自分も社会と関わり、人の役に立ちたい、という思いを大切にすることが大事だということを教えてください。

もう一つ思い出したのが、高齢者の方に花の水やりやヤギのエサやりで本当にわずかなお金をお渡ししたら、とても喜ばれたということ。花の水やりをしてもらった人は夜、グループホームで「これは私があるバイトで稼いだ金だ」とみんなに見せたという話を聞きました。

ヤギのエサやりをした人はお金をもらったのが嬉しかったので、家族にプレゼントを買って渡して、家族の方にも喜ばれたということでした。もう一人はかねがね欲しいと思っていたものをそのお金で買ったそうです。社会と関わった時に、「ありがとう」と言われることも嬉しいのですが、わずかでもお金をもらうと社会に役立つという思いが強くなることもできるのでしよう。

加納

「お手伝いは子どもの仕事であり、面白く思っていた。家族の役に立っていることが誇らしくあり、これも労働の喜びであった。誰しも、働くことの喜びは、生きること、権利であるのではないか」との話から、私ごとですが、年齢に応じたお手伝いを通して子どもの仕事、役割づくりをどうしていったらよいか課題だと思いました。また、介護事業所に勤めていた時、介護サービスとして利用者様にしていた「仕事」づくり、たとえば、配膳や洗濯、調理、物づくりなど役割づくりに頭をひねっていました。中には、仕事と思って来られる方もいたことを思い出しました。『仕事』をして

いただきありがとうございます」と伝えると、必ず笑顔が返ってきました。

また、最近外出先では、高齢の従業員に出会うことが増えました。若い方よりずっと丁寧で気配りの届いたサービスをしてくださるので、とても気持ちよく感じられました。働く姿は、生き生きとした魅力的でした。代表が講演の中でも話されていた高齢者が前向きで幸せに暮らすことにつながっているのだと思いました。

澤田

エンドラとマグダ

若い女性を見守る高齢女性

牧田 幸文

アメリカのドラマの中の女性たちは、時代に反映した華やかさと役割を演じ注目を浴びれるが、主役にも何かと小言を言う脇役の女性たちの存在も重要だ。今回は2つの時代を代表するドラマの脇役の高齢女性を紹介したい。

まず1人目は、1964年から1972年までアメリカで放送され、日本でも人気が高かったテレビドラマ『奥様は魔女』の脇役エンドラだ。ドラマの冒頭の「奥様の名前はサマンサ、そして旦那様の名前はダーリン、ごく普通の2人はごく普通の恋をし、ごく普通の結婚をしました。でもただ一つ違っていたのは、奥様は魔女だったのです」というナレーションはあまりにも有名だ。このナレーションでも強調

されすぎている「普通」に恋をしたサマンサだが、実は、なんでもできる魔法という技術を持っていた。しかし、夫のダーリンはサマンサが魔法を使うことを嫌っていたため、サマンサは魔法を封印して普通の専業主婦として暮らそうとしていた。そんなサマンサの背後に突然現れ、「そんなのあなた、簡単じゃない、魔法を使ってやっつけてしまいなさいよ」とか「どうして? なんでもできるのに、そんなことばつまらないこととして、じつとしているんだい?」と嫌味を言うのが、母親の魔女であるエンドラだ。エンドラは登場するたびにサマンサに文句を言い、サマンサとダーリンの幸せな家庭を壊そうとする意地悪な母親だった。そのためか、エンドラがドラマに登場すると、落胆の声がスタジオ内に広まり、あまり人気のある役ではなかった。しかし、今から見ると、エンドラは、娘の力と技術を引き伸ばそうとし、専業主婦として郊外に居座るような娘ではないことを警告していたのだった。

エンドラの囁きは、同時代に出てきたフェミニストたちの声と言えるだろう。「このドラマが放送された1960年代後半のアメリカでは、若い白人ホワイトカラーカップルが郊外に、自動でドアが開くガレージ、大きなオーブン、食洗機を備えた素敵なキッチンがある家を建てていた。しかし、そんな家に暮らす多くの女性たちは、大学を出て、少し働き、同じ学歴の男性と結婚して、素敵な家の専業主婦になったものの、自分の知識や技術を使うことができず郊外の一軒家にポツンと一人、夫や子供を待っていた。当時のフェミニストで全米女性性組織を立ち上げたベティ・フリーダマンが名付け

た、結婚して幸せなはずなのに、「名前のない問題」を抱えている女性たちだ。そんな女性たちを家から出そうとしていたのが、エンドラの「そんなつまらないことやっつけてないで、魔法を使いなよ」という声だった。

そして30年後、エンドラが叱咤激励したおかげで、アメリカドラマは大都市ニューヨーク(NY)の真ん中で、自分のスキルで仕事を獲得し、恋愛もファッションもほぼ全て? を手に入れた30歳代女性たちのストーリーに代わった。それがテレビドラマ『Sex and the City』(以下ではSATC)だ。「このドラマにも年老いた脇役のマグダという女性が登場する。マグダは、主人公の1人である弁護士ミランダが雇った家政婦だ。ミランダは、マンハッタンの大手法律事務所で弁護士のキャリアを積み、大都市で自分の力で仕事と富を獲得してきたキャリア・ウーマンだ。彼女とドラマの主人公の女性たち、人気コラムリストキャリア、映画のコミュニティ社社長のサマンサ(『奥様は魔女』のサマンサと同名だが全く逆の性格)、そして画廊で働くシャーロットの4人は、大都市で勝ち上がった女性たちだ。彼女たちは、自分で購入した素敵な都心のマンションのペランダで、カクテルを片手に2×の夜色を見ながら「全て持っているわ」と言いながら、まだ持っていない自分たちを大切にしてくれる男性との結婚を夢見ていた。そんな中で、自分より収入も身長も低いバーテンダーの彼と結婚をし、子育てをしながらマンハッタンでバリバリキャリアを磨いていたミランダに、マグダは昔の伝統的な女性の役割を思い出させようとする。マグダは、東欧か

らやってきた移民のおばあちゃん。彼女は母親として、妻として慎ましく、女性移民の典型である家事労働の仕事をして暮らし、ミランダとは正反對の生き方をしてきた。マグダは、育児でイライラしながら子どもや夫に当たるミランダを注意するなど、家政婦というよりは小うるさい姑のようだった。ミランダも母親役割を押し付けようとするマグダを苦手としながらも、彼女の助言を受けながら子育てと仕事、認知症の義母との暮らし、そして夫との関係を修復する。マグダは暴走する「全て持っている」女性たちに少しブレーキをかけるメンター役だった。彼女は今、「ここの暮らしと関係に丁寧に向き合うことを提言する」このドラマになくてはならない脇役だったと思う。そんなマグダの助言を受けて、中高年になったミランダはどうなっているのか。SATCの続編として『And Just Like That』が昨年より配信されている。歳を重ね50歳代後半になった華やかな都会の中高年女性たちの暮らしを見てみたいと思う。



#### 参考資料

『奥様は魔女』シーズン1〜8 1964年〜1972年 アメリカABC放送DVDシリーズ・ピクチャーズ  
『Sex and the City』シーズン1〜6 1998年〜2004年、アメリカHBO放送アマンゾンプライムで配信  
『And Just Like That』セックス・ア・ド・ザ・シティ新章 シーズン1〜2 2022年、Netflixで配信

## 今年も子ヤギが誕生!

今年も6月22日の夕方、チイちゃんが出産しました。一匹は元気で、保育所から教えてもらうまでは気がつきませんでした。

2匹目は「今日出産するような気がする」との様子を見に来られたアサヒさんや、お迎えに来られた保育園の保護者と子どもさん、犬の散歩途中に立ち止まった方など多くの方々が見守るなかで出産しました。しかし産み落とされても赤ちゃんヤギはピクとも動かないので、死産のようでした。しかしお母さんヤギは愛おしそうに赤ちゃんヤギについて汚物などをなめ続けていました。さすがに翌朝は、元気に産まれた子ヤギだけを相手にして、もう一匹には知らん顔をしていました。

昨年はユキちゃんも2匹出産していたせいか、チイちゃんの子どもがユキちゃんのそばに行くとき軽く追っ払っていましたが、今年もユキちゃんは自分の子どもが居ないからか、そばにきた子ヤギとも遊んでやっています。

赤ちゃんヤギは2日間ぐらいは足もとがおぼつかなく、歩き始めた人間の赤ちゃんそっくり。しかしみるみるしっかりしてきて、サクの中の中そこら中を楽しそうに飛び跳ねていました。そして、まだ無理でしょうと思うような時期から、草などが食べている餌に頭を突っ込んでいました。離乳期の近づいた赤ちゃんが、親たちが食べているものを

をほしがる光景そのものだなあと思いました。ヤギも人間も、こうして「食べる」ことを学習していくのでしょうか。

早いもので、もう誕生から2ヶ月。先日アサヒさんが「今日は子ヤギがいらない。もう服部に行ったのかな」と思うほど体も大きくなりました。



## 編集後記



お盆休みを利用して両親の「金婚式記念旅行」私を鹿児島神宮に連れてって〜」を企画し、九州旅行に行って参りました。私の地元松山からスタートし、兄の車で八幡浜からフェリーで大分に渡り、九州を巡りました。(大分↓鹿児島↓宮崎) 母の産まれた地をもう一度見たいということから始まった3泊4日の旅です。二年前に脳梗塞を患い、家族と喧嘩ばかりしていた母親も今ではずいぶん口数も少なくなっていました。「ありがとう」と何度も言ってくれて両親ともに喜んでくれたように思います。

このNPOにスタッフとして入って、以前より高齢者について、若いとは、豊かさとは、などをよく考

えるようになりました。自分もこれからどのように生きたいかも含め、両親の老いもどう受け止めていくか皆様との交流、意見交換を通して益々勉強していこうと思っています。どうぞお気軽に当NPOに遊びに来てください。お話をたくさんお聞かせください。

菊

## お願い

10月の日曜日に、「地域の絆」でお祭りが開かれます。久しぶりにバザーを開催しますので、衣類などバザーに出すものがあれば「持参ください。またおでんなど食品バザーも出店予定です。お手伝いをお願いできる方はよろしくお願います。



## NPOへのお便り募集!

### 問い合わせ・講座申込先

NPO法人コミュニティルネッサンス研究所  
電話・FAX: 084-917-5937  
メール: h5s21bm6@ene.megaqa.ne.jp

「コミュニティルネ」のお便りを募集します。ご感想、ご意見などをTEL・FAX又はメールアドレスにお寄せ下さい。

